

## 編集後記

令和4年度始めの島田義也理事長の所員への挨拶では、環境研に課せられた、設立以来行ってきた事業の総括という大きな宿題に対する研究所の回答書が漸く纏まり、「第3者委員会」による一定の評価を得たことを受け、所内各層多くの方々が多いに汗をかかれたことに謝意を述べられるとともに、5年ほどの後にその「回答書」で示した対処の検証が必ず課せられるものと心に期して、全所一丸となって当たるべく意志の共有が図られた。

また、実際には令和2年12月に既に設立30年を経過していたのだが、研究所の正念場が一旦峠を越えたこのタイミングで、環境研30年史を発刊するとお話された。これを拝聴した聴衆の一員であった私は、先輩方が初期に纏められた五年史、十年史を参考にと理事長にお持ちしたところ、所設立時に在籍された方は既に残っていらっしやらず、初期を知る者も少なくなっていることから、私が本史の編纂を拝命することになった。さらに、現在当所顧問を務められている大桃洋一郎元所長・元理事長は、新田慶治元専務理事が創設された閉鎖生態系プロジェクトの総括がまだ十分に出来ていないと仰り、この30年史事業の中で長年の課題であった当該プロジェクトの記録を残すというミッションも、私には課せられることになった。

なお、本史では、原則令和3年度末、可能な場合は令和4年度末までの状況について記載した。「30年史」と称してはいるが、実質「31.3ないし32.3年史」ということになる。

改めて設立前後の資料を見ると、国内初の大型商用使用済核燃料再処理施設の地元受入れ条件の一つに答える形で設置された環境研ではあったが、当初は再処理施設が竣工し安全性が確認されるまでの限定された期間に、環境と住民の安全を第三者の立場で確認する役割を果たす位置付けであったことが分かる。その中で地元産業振興への寄与を含む期待も寄せられていた。それが2011.3.11福島第一原発事故から、日本のような技術先進国におけるいわゆる「原子力安全神話」の崩壊と共に、世の中の原子力を見る目が大きく変わり、環境研が地道に進めてきた環境放射能安全研究や低線量率放射線生物影響研究の発がんメカニズム解明への進展の重要性やユニークな成果が、世の中やアカデミアから認められつつあることが、この機に海外を含む所外から寄せられた熱いメッセージからも伺い知ることができる。

本史編纂の第一の方針として、こうした研究所の年史本は贈られてもそのまま書棚に収められてしまうことが多いが、この30年史は手に取って読んでみたいと思えるものにしたという島田理事長の意向があった。そこで、写真集に続く冒頭で、環境研主要成果を選抜し、各々1ページでイラストレーティブに作成することを企画した。上に述べたとおり、いわゆるステークホルダー、環境研OB、国内外の外部協力者、地元協力者の方々に依頼したところ、皆様予想以上に快く受け入れて下さり、外交辞令とは思われない熱いメッセージをお寄せいただいた。

環境研の世の中や青森県を含めた地元における認知度を広めることは今なお研究所の課題であるが、その期待の大きさにどう答えていくかは所員個々にとっても念頭に置くべき重い課題であろう。第5部アウトリーチ活動は、これに対応したこれまでとこれからの環境研の姿勢を示すものとして掲載した。しかしながら、環境研の未来は若手の活力なくしては机上の空論となってしまう。第6部として当所若手研究者の生の声を収録し、その意気を示すものとしたというのが、編集者の意図である。

なお、本史のアーカイブとしての価値を高めるものとして、研究機関としての成果を具現化した発表論文リスト、環境研を共に作り上げて下さったともいえる調査検討委員会等委員の方々のリストは省略することなく記載した。

完成した30年史を概観すると、必ずしも環境研の約30年を取りこぼしなく網羅した物とはなっておらず、またこうした年史本として均衡の取れた物ともなっていない。その責を負うとすれば、編集委員会委員長の不徳の致すところであり、予めお詫び申し上げる次第である。

令和5年4月 環境研30年史編集委員会委員長 多胡 靖宏